

〈特集 社会に資する調査とは?〉

## 座談会 運動の記憶/記録の運動

### — 地域社会と調査・記録の現在をめぐる対話 —

#### 座談会趣旨

社会学(者)は、その草創期から近代社会の動態の記述・分析に心を砕いてきた。なかでも社会運動(social movement)は、近代市民社会に特有な現象であり、その研究は冷戦終結後の1990年代以降欧米でふたたびさかんになっている。しかも、現在にいたるまでに社会学が専門分化を遂げ、その内部に多くのジャンルを形成してきたなかにあつて、いまなおジャンル横断的な議論のアリーナを保持しているという。

運動そのものは、「社会の変革を目指した集合的な行為」という古典的な定義よりもかなり幅広いものとなっているといえよう。つまり、必ずしも遠い未来に達成すべき壮大な社会構想を宿したものや、特定の「社会問題」に対して近い将来に達成すべき具体的な目標を掲げたものばかりでなく、達成すべき明確なビジョンや目標をあえて持たず、なにかに抗う行為そのものに象徴的な意味をみいだすものや、かならずしも国家行政の統制からまったく独立しているわけではなく、地域社会のガバナンスなどの一翼を担うかたちの市民運動などが近年めだつ。なかには「集合的な行為」というよりも「個々人のとりくみ」といったほうがふさわしいものもあるかもしれない。現在ある具体的な個々の運動はこれらの諸要素をあわせもっていると考えたほうがよい。

こうした状況のもとで、社会学者は「運動のある社会」とどのように切り結んでゆくべきなのだろうか?これまであまたの運動が記録されてきたし、調査もされてきた。そこでは運動にコミットする当事者たちが能動的・主体的に描かれるのに対し、運動の記録や調査自体は、「記録する」・「調査する」という能動的行為にもかかわらず、ブツ(=映像、報告書、論文 etc.)を残すために対象(運動や当事者たち)を感受・認識する受身のものとして想定されがちだ。だが、かなりアクティブな物言いをする「論者」たちに較べると、記録者や調査者の方がよほど社会的現実や「現場」にコミットしているし、よりひろく社会にむけての発信をこころみているのではないだろうか。

座談会の話者4人の共通点は記録する・調査する、というやり方で運動や当事者にかかわりをもった経験がある、という点だ。当事者と記録者・調査者との関係はどのようなものにとらえられるのか。運動を記録する・調査することそのものを、いかなる実践としてとらえられるだろうか。こうした問いをめぐる、現在進行形で記録・調査活動に従事している4人に論じていただいた一理念的な議論よりも経験からの談話を、という注文つきで。「アカデミアのなかで閉じるのではなく、世の中の役に立つ調査・研究を」というスローガンが大学行政においてもはやされ、「実践的研究者」がタウンミーティングはじめ様々な場で発言する時代(歓迎すべきでもあるし、警戒すべきでもある)。そのなかで、この特集座談会が「社会に資する記録・調査、そして研究」とはなにかを真摯に考える端緒となればと思う。

(白石壮一郎)

出席者

櫻田和也  
(remo 記録と表現とメディアのための組織)

相川陽一  
(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

山北輝裕  
(関西学院大学大学院社会学研究科研究員)

川端浩平  
(関西学院大学大学院社会学研究科特任助教)

司会・構成 白石壮一郎

座談会実施日 2009年4月29日  
於 関西学院大学社会学部棟2階 大学院 GP 事務室

**司会**：本日はお集まりいただきありがとうございます。座談会「運動の記憶／記録の運動」ということで、広い意味での運動、そして地域社会について調査・記録活動に従事しておられる4人の方にお越しいただきました。座談会のねらいは趣旨文のとおりですが、そんなに肩肘張らず、みなさんのご経験や、それにもとづく考えをお話いただければと思っています。

まず、櫻田さん、相川さん、山北さん、川端さんの順に、これまでの調査・記録活動の経緯と、いまどういうことに取り組まれているのかについて紹介していただければと思います。

## ● 映像・運動・フィールドワーク

**櫻田**：2003年から「remo 記録と表現とメディアのための組織」というNPOで働いており、主に現代美術の文脈で映像表現を扱う仕事をしています<sup>1</sup>。いろいろな活動をしてはいますが、具体的にはたとえば映像から映画やTVというような枠を取り払って、文房具のような意味でメディアとして扱えるようになるためのワークショップをおこなっています。あるいは

映画やTVのように商業化される前の映像のあり方を考え直し、映像のもつ本来の力を考える展覧会なども企画してきました。

今日のテーマである「運動」との接点で言いますと、近年では芸術文化がプロジェクト型で事業化されるという傾向がありますし、社会運動において映像の果たす役割も問われるようになってきています。そうした現場をいろんな形でお手伝いさせていただきながら、事業化されたプロジェクトをいかに記録するかということも考えながら活動しています。

**司会**：「文房具としての」というのはremoのwebサイトにも書かれていますが…

**櫻田**：技術革新の結果、比較的安価に撮影機材などを手にすることができるようになりましたが、身近になったその道具がどう使われているのかといえば、ハンディカムのCMに典型をみるように、運動会をお父さんが撮影するというような使われ方が第一に想定されているように思われます。でも、わたしたちが映像を撮ることができるという事態は本来もっと大きな可能性を持ったものだと思います。これまで圧倒的に受信するにとどまっていた映像を、道具とし

1 remoについては、以下のwebサイトを参照。<http://www.remo.or.jp/ja/>

て能動的に使うにはどういうやり方があるかをさぐるのが、大きなテーマです。

**相川**：よろしくお願ひします。ふだん調査のときには録音機を頻繁に回していますが、いざ自分が話す段になるとすごく緊張しますね（笑）。私は現在博士論文を執筆中です。フィールドは千葉県の成田なんですけど、調査していることは大きくふたつありまして、ひとつは成田の空港建設反対運動にかかわった人たち、現地の農家と支援者の双方に焦点をあてて聞き取りをしています。いまは、当時住み込みという形で長期にわたって支援活動をおこなった人びとが全国各地に散っているのですが、そうした方々にインタビューを続けています。一方で、現地での調査もおこなっています。40年以上も続いている運動ですので、フィールドの状況も大きく変化しています。そもそも私の出身地が空港のすぐ近くなんでして、そこに帰って、農業（稲作）をやりながら、空港反対運動を経験した農民と、運動とはまったく関係のない動機から、農業をやりたいという就農目的で近年やってきたIターンの若者たちと働きながら、地域がどのように変わろうとしているのかを調査してきました。

**山北**：こんにちは。ぼくは2000年の、学部の4回生の卒論のときから博論を書く2007年10月くらいまでですけども、野宿者の人たちを支援する団体に参加しながら、野宿者と支援する人たちとの関係性に一貫して着目し、調査を続けてきました。2000年の卒論は名古屋がフィールド、そのあと修士課程から大阪の、主に公園の野宿者の人たちを中心に支援活動をしながら聞き取りをおこなってきたという経緯です。

**司会**：ここの関西学院大学大学院社会学研究科は、それほど院生や研究員（いわゆるオーバードクター）が多いほうではなくて—実質30人くらいですか、そのなかでフィールドワークで質的調査をやっている人が多く、それがこの座談会を企画した理由のひとつでもあります。その

なかに野宿者の支援をしながら野宿者と支援者について研究している人が山北さんふくめ3人もいますよね。全国的にこのテーマで調査・研究をやっている社会学の若手研究者って、多いんでしょうか。

**山北**：最近は多いですね。少し研究史に触れると、1950-60年代くらいの寄せ場研究は、現場に研究者がなかなか入り込めず、警察の統計などを使った研究—「社会病理学」が主だった。それでやはり現場から「これが学者の仕事か」という批判があるんですけど、その後に解放社会学のグループが現場に入り込むんですね、がんばって。そういう先人たちが現場で関係を作ってくれ、そのあとの若手たちが「支援者」として現場に入っていくという近年のスタイルがでてきた。もちろん、多様な支援団体が出てきたということもこの背景にはあります。

**川端**：ぼくの場合は、フィールドワークによる調査に関わり始めたのは2002年、当時はキャンベラにあるオーストラリア国立大学の博士課程の院生でした。それまでは運動といったものにはなにかかわりはなく、運動といったら、野球。ずっと野球部だったんで。ではなぜ運動のようなものの研究をやろうと思ったか。まあそれ以外の選択肢が少なかったということもあるんですが、学部はカリフォルニア大学ロサンゼルス校で、日本研究（Japanese Studies）を専攻しました。最初は哲学を志したのですが、とにかく言葉が難しすぎた。日本研究は比較的やりやすいものとして選択したのもでもありました。修士課程は新潟の南魚沼にある国際大学。当時問題になっていた「新しい教科書をつくる会」に代表されたような同時代のナショナリズム的な動向のディスコース分析をしました。その後オーストラリアで博士課程に入ったときに先輩などから、フィールドワークが向いてるんじゃない？と薦められ、じゃあそれでナショナリズム関連の研究を続けていこうかと。そこでフィールドにどこを選ぶかいろいろ考えたこと

ろ、自分にとっての日本というのは自分の育った地元であり、そこで生活している人たちだと思ったり、地元岡山にもどって自分の友人が働いている企業で参与観察をしながら「日本人の意識」などを考えつつ、ナショナリズムや差別の対象となる在日コリアンの研究をしようと思ったんです。そこが出発点。それから調査を続けていくうちに、「地方」という新たなテーマが浮かび上がってきます。

「地方」というのは通常、「中央」に対する「地方」というように位置づけられてきました。近年の地域社会学の文脈では「地方」と呼ばずに「地域」と呼びます。そこでは「地域」というのは常に肯定的に、エンパワーの対象としてとらえられていくんですが、なかなか「地方」を批判的にみていくような研究動向がなく、しかしそこは重要だと思って、住みながら地方というものに対してクリティカルな研究をしようと思ってこれまでやってきたんですね。2006年に博士号を取得しましたが、帰国後も地元岡山に帰って博士課程以来これまでずっと調査を続けてきました。

**司会：**司会の白石です。みなさんは日本でいろいろな調査や記録の活動歴をお持ちですが、私の場合はアフリカの農村に通って住み込みで人類学の調査をしてきまして、フィールドワークをしているということでは川端さん、山北さん、そして相川さんと共通しています。「運動」の調査や記録、ということでは…運動に深くコミットしたことはないものの、大学学部（札幌）から大学院（京都）までのそれぞれ、短くない期間寮に住んでいました。歴史のある大学の寮というのはいろいろな人が集まってくるところで面白いのですが、そこでさまざまな運動をやっていた人に知り合いがすこしでき、それぞれのローカルな寮運動には自分もある程度はかかりました。だから1990年代から2000年代前半の運動や運動に関わる学生がどういう風だったのか、その変化も含めてなんとなくはわかる

というかんじですね。以上、簡単ですが。

## ● 社会運動の映像記録とその即時的フィードバック

**司会：**さきほど櫻田さんが運動の現場に映像を活用する、とおっしゃいましたが、去年（2008年7月）のG8洞爺湖サミットの事例についてお話しいただけますでしょうか。

**櫻田：**去年の洞爺湖サミットに関してはいろいろなマスコミの報道もありましたので多くの方がご記憶でしょう。このサミットに関してはいろいろな観点から代案を提起したり抗議する団体もあり、世界的な注目も集めて世界各地から沢山の人たちが来るという状況があって、そこに自分はいろいろな形で関わりました。そのひとつがG8メディアネットワークで、これはいま日本でも「市民メディア」という言い方で注目されているように、いわゆるマスメディアの報道とはちがいで、市民が自らの手で情報を発信し、あるいは取材をして人びとに伝えていくことをするわけです。そこで、洞爺湖サミットの現場でそれぞれの立場から抗議する方々の伝えたいことをどのように伝えるかということを考える複数の集団が集まり、メディア活動と報道のための拠点づくりを、おおよそ1年くらい前から準備を始め、G8開催時期には市民メディアセンター（CMC）という名称で札幌市内に3箇所設置することができました。

洞爺湖現地周辺には諸々の抗議団体・個人のためにキャンプが用意されていたのですが、そのキャンプにもメディアスポットを2箇所設置しました。札幌市内に設置したうちのひとつは北海道大学内で、ここは公な情報発信を担うプレスセンターとして機能しました。それから、スタジオ機能とイベント会場を兼ねた施設として行政から借り受けたところもありました。ここはアマルク（AMARC；世界コミュニティラジオ放送連盟）をはじめとした諸団体の

活動拠点となりました。そこはまた札幌市内外のいわゆる「市民」の方々と、海外からこられる人びとと一緒にアマルクはいわゆる開発途上国からこられる方々も多いので、そうした方々との交流のための会場機能も備えたものでした。そしてもうひとつは、民間企業からフロアを借りたセンターでしたが、ここは利用内容に関する制約と技術的な制約が少なく、かなり自由に使える条件が整いましたので、24時間体制で仮眠もとりながらメディア活動に従事する人たちが使えるセンターにすることができました。東京のOur Planet TVというインターネットTVの報道拠点になったのもここです。

海外からやってきて日本で自由のきく場所を確保することが容易にはかなわないようなメディア・アクティビストらが、以上のような態勢で、各拠点に出入りして夜通し使えるという条件をなんとか整えることができたわけです。さきほど申し上げたうちでさいごのセンターには、remoのメンバーも撮影する立場とマネジメントの立場とでお手伝いさせていただいたG8メディアネットワークのビデオ・ユニットも入っていて、そこを事前登録した参加者や、市民メディアセンターがあることは知らなかったけどもビデオカメラを持って現場の様子をなんらかの形で記録したり伝えたいという意志を持ってこられた方々が利用しました。

7月5日、札幌市内で行われた最大のピースウォーク（デモ）があり、参加者が不当にも逮捕されるという事態があったのですが、そのときにも現場でいろんな視点からカメラを回していた方がいました。そこで主にビデオ・ユニットが声をかけて、そのときの記録をかき集めました。当日、せいぜい数時間のあいだに起こった出来事を、いろんな位置から、カメラを回したり止めたりしながら撮っているという粗い記録が大半でしたが、それらの映像群をどういう形で整理し、どういう形で共有することができるだろうか、と考えました。じつはあの現

場のただなかにいたとしても、それこそ何千人もいましたので、かえって全体のどこでなにがおこっているかは把握できない。逮捕者が出たということを終るまで知らなかった人もいたくらい、現場にいたら全部わかるというものではなく、そこではかえってみえないこともたくさんあるのです。もちろん、現場で記録していた人も全景を把握することはできなかったはずですから、それらを集めて検討してみようと。集まった映像の中で比較的長時間撮られているカメラに収められたものを選んでみようという考えから、結果15本ほどの映像が選ばれ、それらをカメラに記されたタイムコードを頼りに時間系列で並べます。そしてカメラの数だけモニターを用意して、ヨーイドンで同時に上映するという試みを、ひとつのインスタレーションと



■ 櫻田和也（さくらだ・かずや）

NPO記録と表現とメディアのための組織 [remo]。2000年よりフリーランスのサーバ技術者。2003年より現在のNPOに参加し、メディア・アートを通じて「メディアになる」身体づくり、「文房具」としての映像ワークショップ、映像をめぐる場づくりなどをテーマに調査研究、展覧会等の企画・制作を担当。論稿に「反時代的・映像の居場所」（『現代思想』3513号、総特集ドキュメンタリー、2007年）、「プレカリアート—現代のプロレタリア階級」（『共生社会研究』3号、2008年）がある。現在、大阪市立大学都市研究プラザ特任講師を兼任。

して京都の同時代ギャラリーで展示しました。その展示が、あの出来事から約2ヵ月後のことでした。

**司会：**ひと昔の社会運動の当事者が持っていたメディアといえば看板（タテカン）とビラ、機関紙。あとはプロや学生が撮影した記録映画のたぐい。このなかでより即時的メディアとなりえたのは看板とビラです。ですが昨今は、いまの話のG8抗議デモで逮捕者が出たときや、長居公園の行政代執行<sup>2</sup>のときもそうでしたけど、事が起こってその翌日とか3日後にYou Tubeでその現場映像が閲覧できたりする。即時的に出来事や状況を伝えるメディアとして映像の位置が上昇してきています。さきほどの例で言うと、9月のギャラリー展示前に、デモ現場の映像がたとえば洞爺湖のキャンプサイトなどへ即時的にフィードバックされたというようなことはあったんですか。

**櫻田：**できるかぎり工夫はしました。当日の逮捕の様子をとらえた映像もありましたので、G8メディアネットワークとしては即時的報道機能を果たすために、該当箇所をフッテージ（編集前の素材としての映像記録）としてアップロードするというも行ないました。ただその数日後には大勢が洞爺湖のサミット現地周辺のキャンプ地に移動することになったのですが、そこは電波も弱くISDNの細い回線をみんなで共有して使うという状況だったこともあって、即時性はかなり損なわれてしまったのが実情です。洞爺湖周辺で行われた抗議行動の模様をいちばん早く報道したのはたしか報道カーを出していたNHKで、われわれではなかった。

G8メディアネットワークは現地キャンプに、プロジェクターとスクリーン、それに音響機材を持っていきました。その場でさまざまな情報を共有できる機会をつくるためです。移動したその日の夜にも、持ち寄られた世界各地の映像を上映し、語り合うような時間がもたれたと聞いています。

## ● 運動を日常から照射すること

**司会：**運動の現場での即時的メディアとしての映像、というお話でした。ほかの3人の方は、書いたもの中心の活動ですよ。書いたもの、とくに学術論文などはこうした即時性は期待できません（し、すべきものでもないでしょう）。では論文は運動とか運動のある社会を記述するのに適していないのか。もちろん否、です。いまのG8の例は、せまい意味での社会運動、運動の一局面、いわば一番派手なところですよ。運動というのをもっと広く運動のある社会、運動の記憶と社会という広い時空間のスコープで、しかも日常的な視座からみてるならば、むしろ普通の生活のなかでの人びとの地道な取り組みや葛藤の部分を記述するのに、文章で書かれるものは映像と同様かそれ以上に有意義なメディアとなりうるでしょう。というわけで、ついで3人の方々には広い意味、広いスコープでの運動の記述の局面についてお話しをうかがってみたいのですが。

**相川：**映像の話から続けますと、1960-70年代の記録映画の作り手としては、小川プロダクション<sup>3</sup>が有名ですが、それに先行して、岩波

2 2007年2月5日、大阪市は同年8月に迫った世界陸上選手権開催のための公園内整備工事を理由に、長居公園の野宿者テントを強制的に排除。当事者、支援者らがいるなかでの代執行の様子はマスコミにも多数報道された。支援者・当事者を中心に編まれた以下の記録集がある。記録集編集委員会編 [2007]『それでもつながりはつづく—長居公園テント村行政代執行の記録』、ビレッジプレス。

3 映画監督小川紳介（1936-1992）は1960年代前半に岩波映画製作所で映画制作に従事。1968年に小川プロダクション設立。以後74年半ばまで小川プロは住み込みで三里塚を映した数多くのドキュメンタリー作品を発表。その作品群は海外でも評価され、以下のような研究書もある。Abe Mark Nornes [2007] *Forest of Pressure: Ogawa Sinsuke and Postwar Japanese Documentary*. University of Minnesota Press.

映画のようなスポンサー映画の世界で修行してきた小川紳介や土本典昭らがいた「青の会」という独立映画運動の流れがありました。小川が強調していたのは、ドキュメンタリーというのは撮る者と撮られる者との関係性が映りこむのだ、ということ。これは社会学や人類学でもここ10年、20年の間で議論されてきた点ではあり、社会調査をする者にとっても非常に重要な視点だと思いますが、ドキュメンタリー映像作家たちはそれにずっと先んじて議論していた。

当時小川紳介は雑誌『展望』に対象との同一化というテーマで文章を書いています<sup>4</sup>。かれの場合はやはりよそ者としてフィールド（三里塚）に入って行く過程で、激しい闘争のさなかで己が何者かということが常に問われる。小川プロ作品の特徴として言えるのは、撮影が長期にわたる現地住み込みによっておこなわれていること、そして機動隊の背後からではなく農民の側からカメラを構えて撮られていること。こうした特徴的な手法によって、三里塚というフィールドでのかれ（ら）の立場性を明確に表明されたように思います。かれの映像をみると、農民の側から押され押し返す人びとの様子をつぶさに撮っている。撮影スタッフが逮捕されたこともありました。（当事者や対象との）関係性を問う、という一つの形がそこにはあったように思います。

**司会：**これから先の議論と繋がる場所だと思うのは、やはり長期でフィールドに関わりつつ記録・調査するという点ですかね。小川プロは機動隊が来たときだけ勇んで現場に急行したわけではなく、普段の生活、農作業の時間などをともにして「関係性の構築」なり「視座の共有」なりをしていく。ところがこの長期間かかわって記録・調査するという、これ、方法

として手短かにどのようなものと言えるのが微妙で、端的に「方法はなんですか？」と聞かれたときに「参与観察です」「フィールドワークです」「直接観察と聞き取りによるものです」などと当座は答えますが、じつは何の説明にもなっていない（笑）。そういう説明を受けても、実際のところどんな調査をしているのか、同一の方法にのっとれば再検証が保障されるのか、など不分明なところがある。そこで、長期間おなじフィールドに関わっておられるお三方から、試行錯誤しながら確立していった調査のスタイルなどのお話を一どちらかといえばむしろ試行錯誤の部分を中心にかもかもしれませんが、お聞きしたいと思います。

いま、撮る側と撮られる側の関係性という話がありましたね。山北さんが書かれたものなかで印象深い論稿として野宿者支援における〈応答困難〉の現場について述べたものがあります<sup>5</sup>。あのなかでは、支援者としての山北さんと支援のあて先としての野宿をしている人たち、この両者の関係性の確定化の契機と不確定性の表出とのあいだでの戸惑いが議論されていますね。支援者と被支援者とのよき関係が成立している「仲間」という前提が、相手に支援を「拒否」されることによってゆらぐ。しかし支援者の声かけに対して野宿者が黙って手を横に振るなどの「拒否」の場面は、じつは相手によって一方的に構成されるのではなく支援者の側の解釈や加担があったうえで完成されているのだと。たとえば相手が支援の呼びかけに対して無言であり、それに対し支援する側も黙ってビラを置いて立ち去る。そのときに「拒否」らしき場面が成り立ってしまう…

4 小川紳介・佐藤忠男（インタビュー）[1968]「観察対象との同化を…（特集：現代芸術のフロンティア）」『展望』118号、筑摩書房、pp. 134-137。

5 山北輝裕 [2006]「支援者からの撤退か、それとも…—野宿者支援における〈応答困難〉の現場から」、三浦耕吉郎編『構造的差別のソシオグラフィ—社会を書く／差別を解く』世界思想社、pp. 205-235。

## ● 参与／観察？ — フィールドで結ぶ 関係性

山北：そうですね、細かい話からしていくと、ぼくは2007年くらいまで支援活動をだいたい週に1-2日ペースで関わり続けてきて、たとえば福祉事務所に付き添っていったりだとか、野宿者支援で全国的にやっている夜間パトロール、安否を気遣ったり、炊き出しあるよとかそういう情報を伝えたり、ただ単純に交流したり。そういうことをやってきた。そうした活動を、自分の支援者としてのポジションから書いたものが、いま紹介された文章ですね。そもそもそういう文章を書けるようになるまでにだいぶ試行錯誤があって、参与観察の初期に一番悩んだのはやはり、よく言われたんですけどお前スパイなんじゃないかと。調査者なのか、それとも支援者なのかよくわからない、と。

鵜飼正樹さんの「これは社会調査ではない」という、参与観察をめぐる述べられた論稿があります<sup>6</sup>。参与観察という方法は、一方に完全な「参与」があって、もう一方に完全な「観察」がある。完全な参与というのは、研究者という身分を隠してあたかもスパイのようにある集団や組織に潜入することで、完全な観察というのはある集団や組織をあたかもビデオカメラでモニターするかのようには眺めること。で、じっさいの参与観察というのはこの完全な参与と完全な観察とのあいだにあるもの、と考えられることが多い。だけどその図式でいくと、参与を重視すれば観察がおろそかになり、観察を重視すれば参与がおろそかになる。つまり参与することと観察することは相容れない、というイメージが根底にありますね。これは一見すぐく妥当にみえます。でも、鵜飼さんも述べてい

るとおり、その前提はじつはちがうのではないかと。参与することと観察することとは相容れないのではなくて、参与することを通して観察することが参与観察なんじゃないか、というわけですね。ぼくもそう思います。つまり、意識して観察しようとするのではなく、参与していくなかで見えてくるもの、身についてくる視座からその集団を見ていくこと、さらにはその視座から社会全体を照射していくような営みが参与観察なのではないかという話です。

これはけっこう達観だと思います（笑）。こういう達観に到達するまで、こういう感覚をもてるまでにはかなりの試行錯誤がありまして。



■ 山北輝裕（やまきた・てるひろ）

関西学院大学大学院社会学研究科大学院研究員。2000年ごろより、名古屋、2002年ごろより大阪の野宿者の支援活動に従事するかたわら、参与と聞き取りによる調査を実施。論稿に「支援者からの撤退か、それとも一野宿者支援における〈応答困難〉の現場から」（三浦耕吉郎編『構造的差別のソシオグラフィー—社会を書く／差別を解く』世界思想社、2006年）、「野宿生活における仲間というコミュニケーション」（『社会学評論』57巻3号、2006年）がある。2009年3月に博士論文『路上コミュニティの仲間たち—野宿者と支援の社会学』を提出。

6 鵜飼正樹 [1991] 「これは『社会調査』ではない—参与観察をめぐる五通の手紙」 仲村祥一編『現代的自己の社会学』、世界思想社、pp. 94-108。



たとえば初期にはすごく失敗していて、現場でメモを取りたいと思っていたんですね。実際にメモを取っていたんですが、そうすると福祉系の大学院生の人たちから「あ、いま参与観察中？」とかイヤミを言われたりして（笑）。それからメモをとることをやめたりするんですけど（一同爆笑）。そこから、もう覚悟を決めてとことん入り込んでいこうと。そのあたりから、うまく言えないんですが、なんとなく現場の人よりも入り込めてるかもと感じてきたり、だいたい気が楽になってきて、ふとちょっと引いてこれまでためてきたフィールドノートとかを見直してみると、なにか書けるかもしれないというような感覚に徐々に慣れていくんですけどね。そこに到達するまでにはまだ長い時間ともしっかりとした事件やイベントがあります。

**川端：**事件というのは、フィールドで起きたことですか？

**山北：**フィールドです。よく怒られるんですね、ぼくは。怒られてそこで去ってしまえばそれまでなんですけども、けっこう食いついてがんばっていくと、そこからちょっとお茶でも飲みにいこか、みたいなかんじで、支援者に連れられて、そこで現場での悩みを打ち明けたりしたんですね。「野宿の人からこんな風に怒られた」とか。そこで支援者の人からいろいろアドバイスをもらったり。わりとそんなときに、こいつはわりといいところに目を向けているな、と思われたみたいで、そういう積み重ねから…

**司会：**もっとも集中的に調査（あるいは支援活動）していた頃は、毎日のように足を運んでいたんですか？あるいは現場に泊り込んだり…

**山北：**1年目の、卒論書きの最後のほうに初めて野宿しました。それまではちゃんと家に帰ってました（笑）。寝ていけ、とよく誘いを受けましたけど、おじさんたちから。

**司会：**その通いでやるのと、寝泊りするのとではなにか変わりはしましたか。いっしょにご飯食べてお酒飲んどかしてると。

**山北：**そうですね、それはよくしましたね。それはもういっぱいありすぎて、どれを話したらいいのかわからないくらい…

**司会：**その関係性の持ち方によって、こちらの認識、そして書くものが変わってくるというところが—小川プロの話のように映像もそうなのでしょうけども、こうした長期の参与観察の収穫として大きいと思えますね。

**山北：**関係性の構築という点にちなんで、ぼくにとって決定的だったのは、寄せ場とかホームレス関係の運動で、「仲間」という呼称の使用。この言葉は当事者を意味する独特のもので、たとえば「大阪駅の高架下に住んでいる〈仲間〉」って言います。「おじさん」とか「ホームレス」「野宿者」とは言わず、「仲間」というように支援者が使う。家に帰ってる人が、「仲間」と。これを知ったときにある種の衝撃と違和感があった。調査1年目の年の夏祭りで追悼集会というのがあって、その年に亡くなった人のことを悼むのですが、そこで追悼文を読みあげる役になったんですね。で、怖いんで、自分で書いた読み上げ原稿を支援者の人に添削してもらったんですよ。ぼくはそのとき（野宿者のことを）「労働者」と—それでもがんばって「野宿者」や「おっちゃん」でなくて「労働者」という呼称を使っていたんですが、それに「ことばが丁寧すぎる」と支援者の人に言われ、「仲間」にしろ、と赤を入れられました（同様のことは野宿をしている人にも言われた）。それを震えながら、「仲間の方々…」と読み上げたんですね。それがきっかけで、支援者が率先して「仲間」という呼びかけを使うってのはどうだろう、と考えるようになって、ずっと支援者と野宿者の関係性そのものをテーマにするようにもなったんです。ぼくの調査史にとっては決定的な出来事でした。

**川端：**ぼくはそこまで困ったことはないけども、それに類する困った状況に接したとき、たとえば調査途上で向こうに「お前、××をしろ

／するな」と言われたりしたときには、それをひとまずは実存的にひきうけるのではなくて、方法の問題として片付けようと思います。別の方法でやれることはあるんじゃないかと。あるいは、向こうへの申し開きとしても、私の調査はこういう目的なので、この方法でやるしかないんですが、と。そもそもそれは自分の探っていた社会調査の方法自体の限界と考えられるのかもしれないし。現場に深くコミットして悩みぬ



■ 川端浩平（かわばた・こうへい）

関西学院大学大学院社会学研究科特任助教。2006年、オーストラリア国立大学大学院博士課程にてPh.D.（日本研究）取得後、吉備国際大学非常勤講師などを経て現職。論稿に“Consuming fear and justice in a declining welfare state: The case of the Okayama Guardians”, (*ASIANRIGHTS*, Issue 6, 2006)、「スティグマからの解放、「自由」による拘束—地方都市郊外で生活する在日コリアンの若者の事例研究」（『解放社会学研究』21号、日本解放社会学会、2007年）がある。

くのも重要なプロセスですが、その回避や克服のしかたもいろいろです。ほとんどの場合は方法の問題として考えてみます。

**司会：**ちょっとわからないから、具体例を。

**川端：**山北さんの状況とはだいぶ違うのですが。ぼくはいつも、対照的もしくは対立的と見られるふたつの社会集団を同時並行で調査します。たとえば博士論文のときは、地元岡山での日本人の側から見た在日、参与観察の対象は中小企業の従業員でした。でもそれだけでなく、在日コリアンとかかわりのある日本人にも聞き取りをやった。近所に住んでるとか、かつて学校と一緒に通っていたとか、職場が同じとか。だからぼくは「差別的」な見方をする人にもどんだん話を聞いていくし、一方では在日コリアンの人たちにその逆の経験を聞いていく。いまやってる調査で言えば、やはり岡山ガーディアンズ<sup>7</sup>という地元をパトロールする防犯ボランティアの社会集団にインタビューする、もう一方でかれらのパトロールからは排除の対象となりそうなホームレスにも聞き取り調査をする。

こうした調査のプロセスでは当然、自分なりに悩みはします。立場的には、ホームレスの支援活動にも多少は関わっていますし、在日コリアンのネットワーク作りというのもやっている。ある集団の人たちとの関係性というのはほとんど困ることはないんですが、その逆側に位置するかのような集団の人と話をしているとき、あるいは実際に文章を発表するとき、そこでいつもジレンマを抱えることになります。一

7 1979年、ニューヨークのサウスブロンクスのマクドナルドで働いていたカーティス・スリワ（Curtis Sliwa）と12人の仲間が、「崇高な13人（The Magnificent 13）」というグループを結成し、それが後にガーディアン・エンジェルズとなる。当時治安の悪化していたニューヨークの地下鉄を出発点とし、国や警察に頼らずに自分たちのことは自分たちで守るという、反体制的・草の根的な視点から活動を始めた。元NY市長のルドルフ・ジュリアーニ時代に認められて以降、政府や警察らの理解を得て活動を行っており、現在では世界11カ国、100以上の都市にその支部が設置されている。ガーディアン・エンジェルズの日本支部が発足したのは1996年のことである。その背景には1995年に阪神淡路大震災とオウム真理教の「地下鉄サリン事件」があったという。1998年4月に発足した岡山ガーディアンズは、岡山県警察本部安全部生活安全企画課から岡山県防犯協会への委託事業として活動を開始した。メンバーは公募ではなく警察の関連団体や大学などに依頼して集められた。

時期は夢に出てきました、岡山ガーディアンズの赤い制服を着た人が。「川端さん、なんであんな風を書くの？」とか詰め寄られて（笑）。在日とかホームレスの研究をしているときにはやはり支援者的な立場どりがあるのでありますが、対立する可能性のある立場の人たちを調査するときにも、向こうからは協力者だと思われているなかで調査しているんですね。「川端さんもメンバーとしていっしょにパトロールしてください」と。

**司会：**その、岡山ガーディアンズの方々は川端さんがホームレスの人びとの調査をしていると知っているんですか？

**川端：**知っています。知っていて、おそらく微妙な緊張感はあるんでしょうけども、つつこんで聞かれたり糾されたりということはないですね。悩ましい状況といえそうですが、あまりそれを引き受けすぎて自分がこうしてないからダメなんじゃないとか、考え詰めてしまうと先に進まないようなこともあるので、ある程度割り切って克服する。だから実際に悩んだのは悪夢くらいかな（笑）。だけどぼくのやったような調査って、ほかにあんまりないですよ。対極の立場と目される側にも話を聞きに行つて、向こうの側の立場にもある程度コミットしながら調査をしていくやり方って、あんまりないと思う。じっさいにしつこくやってみるとある程度は可能なんです。ある程度は理解可能だし、相手のことがよく見えてくる。ぼくの場合はその調査後に書いたものを見せ、発表の許可を得る、ということでフェアな関係を保っていると思っているんですけど。

**司会：**そのとき感想とかコメントをくれたりします？たとえば「なにこれ、お前はこういう目でおれたちを／やつらをみていたのか」というような批判とか。

**川端：**それはないですね。そしておそらくじっさいにそういう風には思われてないんです。だから、外野が過剰に思い込んでそういった社会

的敵対が構築されていくということもある。ぱっと原稿をみてもらったら、いやなところは指摘してくれたりしますよ。それだけですむ問題ですね。ああそうだったんだ、という。

**司会：**話をお聞きしていると、山北さんとの対比で言えば、川端さんは調査者というポジションにしっかり居て、ホームレスとガーディアンズとに関わっている。他方、山北さんは調査を始めて、現場にどんどん没入していったというかんじですね。

**川端：**もうひとつ大きな違いがあります。岡山のような地方のクリティカルなフィールドスタディーって、誰もやっていないんです。在日のこともやられていない。自分がぜんぶ開拓していくんです。そうすると現場の統制をある程度握ることになるから、周りの人からあまり文句を言われたりしないんです。要するに山北さんの場合は自分に先行する「支援者」がいたからかれらに言われるということですよ。ぼくの調査の場合はそういう人たちがほとんどいない。調査に関わってくるなんの既得権益もない。

**櫻田：**川端さんに対して、「ネットワーク作りをしている人だ」という理解が成り立ちますものね。

**川端：**だけど、ハンディもあって—それがまた地方の研究にこだわっている理由でもあります。参照したり準拠したりするものがなにもない。調査上、活動上の関係もなにもかも、イチから自分で作っていく。だからこそ山北さんの経験されたような強烈な出来事は、ぼくには生じなかったともいえる。

## ● 「地元」を調査すること

**司会：**川端さんと相川さんは、どちらも生まれ育った地元をフィールドに選ばれています。単純に、地元で調査ってやりにくいんじゃないかなと思うんですがどうでしょう。長期参与観察においては「調査者」というポジションは擬制

というしかない。だけど、たとえば私のようにアフリカの農村に住み込み調査をする場合には、見た目や風体からして明白なる他者なので、そういう擬制も成り立ちやすい。その意味でその擬制がもっとも成り立ちにくいのは自分の「顔が割れている」地元であり、もっとも調査者としてふるまうに適さない場所とも言えるでしょう（笑）。逆に、手持ちの社会関係を手繰って聞き取り相手を調達できるので有利だということかもしれません。

**川端**：おっしゃるとおり、やりにくさとやりやすさと両方あります。まずやりやすさの面では、圧倒的に地の利があること。これは調査をするうえですごいアドバンテージで、生かしていいことだと思うんです。もう一方でやりにくい点というのは、ひとつはしがらみが発生しやすいこと。たとえば、聞き取りの対象者を誰かに紹介してもらおうんですけども、その人の悪口にとられることを言ってしまうえばその人と紹介者との関係が悪くなるとか、そういうところに気を使わなきゃいけない。もうひとつ、もっと難しいのは、自分の知ってるものごとに接すると、なにか刺激がなくてそのまま受容するんですよ。インタビューしていてもつまらないと思えることだったらこっちはダラっとしてきちゃって。乱暴に言えば家族的な関係になってしまうというのかな、家族みたいになれば他者性がなくなってしまって、興味を持てなくなるんですね。地元での調査って、朝起きたら自分の家だったりするわけですよ（笑）。昔から居る自分の部屋で。そういう日常性の壁みたいなものがある。だけどその壁をひとつ突き抜けてゆくと、面白い発見がたまにあります。

ぼくは自分と調査対象者との関係を、書いたもののなかでできるだけ開示することを心がけています。自分の友だちなどを聞き取りの対象者にしましたし、相手の了解を得て関係を開示してしまう。なぜそこにこだわったのかというと、博士論文が日本研究という分野だったこと

が関係します。ぼくのような留学先の日本人大学院生は、どうしてもネイティブ・インフォーマントとしての役割を期待される。乱暴に言えば、欧米の留学先で、向こうに都合のいいこと、向こうの聞きたいことをしゃべられる。それに便乗してこちらとしても向こうに受けのいい、都合のいい部分を出して、隠したい部分を隠すということもできる。ゲイシャだオタクだヤンキーだと言っていればそれだけで終われる。これまで英語で書かれた日本研究で、そういうものは少なくないのです。そこに問題意識がありました。そういうやり方ではなくて、必ずしも向こうが興味を示さない、分かりやすい記号として通用しないような要素も入れ込んでみよう、そのためにエキゾチックなものを取りはらう方法の一環として、同じ日常を生きるインフォーマントとの関係性を全部開示するというのをしました。

**司会**：たぶん社会学者の半分くらい、人類学者のほとんどは、ものごとのわかりやすいベタな側面や派手な側面ではない部分に光を当てるような仕事をやってきたでしょう。ですから川端さんの志向は私としてはとても理解できるものです。さて、相川さんの場合は、地元で調査するだけでなく、かつて地元で運動に関わった方々を訪ねて、その方々の運動の記憶と向き合うような聞き取りを続けておられますが…そうして全国の方々を訪れる際に、それらの方は昔から顔見知りの方々なのか、それとも人づてにたどって浮上してきた初対面の方々なのか、そのあたりからお話をしていただけませんか。

**相川**：支援経験者への聞き取りの際にお会いする方々は、私が覚えていなくても相手の方が私を記憶しておられるという場合も少なくないです。家族をはじめ現地で私の周囲にいる人びとを知っているという方となると、もうほとんどです。その意味で、まったき他者として私が聞き取りの相手の前に現れる、という状況はないと言っていいでしょう。なんらかの形で三里塚

と縁のある方たちですから。川端さんのお話を聞いていて思ったのですが、私はこれまでにインタビューの相手との関係を積極的に開示してこなかったなと思いました。インタビュー内容自体はまだ博士論文として執筆中ですが、そこには調査手法や手続きを相当量書き込まなくてはならないでしょう。調査自体が、調査者（私）の来歴や社会的属性にかなり依拠して成り立っている面があり、おそらくそういった形で三里塚と縁のない人だと話し手にアクセスすることは非常に困難であるような、そういう調査だと思います。

他方で、私の場合は地元で調査するうえでやりにくさを感じたことが、のちの地元外の支援



■ 相川陽一（あいかわ・よういち）

一橋大学大学院社会学研究科博士課程。1999年ごろより地元成田で空港反対闘争にかかわってきた農家に聞き取り調査をおこない、2007年からは闘争の支援者に全国的な聞き取り調査をおこなう。同時に農業見習い。無農薬野菜の産直販売グループ「東峰べじたぶるん」メンバー。論稿に「成田有機農業の軌跡と展望：空港城下町で地域自立を考えていくために」（『ハリーナ』2(5)号、2009年）。「まちづくりの担い手は誰か：地域再生に向けた取り組みの現状」（町村敬志編『開発の時間開発の空間』所収、東京大学出版会、2006年）。もっか博士論文『運動経験の散種—地域社会と参加者に投影された三里塚闘争の経験をめぐって』（仮）を鋭意執筆中。

者調査の構想につながっていったのかもしれませんが。しかし、地元をフィールドに据えた調査のアドバンテージを考えると、やはりさきほども話題に出た地の利は大きい。あとはフィールドにおいて先行的に蓄積されていた人間関係があること。ただ、関係が近すぎるとなかなか聞き書きという関係には入りづらい面もあります。「自文化は記述できない」という文化人類学のテーゼがありますが、川端さんのおっしゃるとおり、調査者にとって半ば自明化してしまっている場を、調査のフィールド（現場）として対象化していくという認識上のシフトはひとつの困難な過程としてあって、今にいたるまでにその過程を抜けられているのかどうかはわかりませんが、博士論文を書く過程で突き抜けたと思っています。これが方法面での課題ですね。

地元で調査する際に調査者は、「お前は何者であるか」ということはよかれ悪しかれ問われないのですが、私の場合「これまでどんな人と話をしてきたのか」とは、聞き取りに行った相手の方からしばしば問われました。話す人の立場からすれば、事前にそうしたことを聞いておきたいと思うのは当然と思います。話を聞いた人々が、対立関係にある場合もあります。くりかえしになりますが、そういう調査上のプロセス自体も論文に書き込んでいくというのが大事なんだなと、いまお話しして思った次第です。

**司会：**相川さんがこれまでに聞き取りのお話をした相手に党派として対立する（していた）立場の人がいたと明らかになった際、聞き取り調査自体を中断されたということはありますか？あるいは通常だったらそうしたことは十分にありえたが、相川さんだったからできたのだろうか、というようなことは。

**相川：**ありがたいことに、そうした理由で聞き取りを断られたという経験はありません。断られるのは、聞き取りの現場に行くよりも前の段階です。運動経験に関する聞き取りでは、さま

ざまなスティグマを負った方やスティグマの語りに出会います。調査にまつわるそうした事情から、申し込みの段階で「いまはしゃべれない」と断られることはあります。

## ● エスノグラフィーと作家性

**川端**：さっき開示するという話をしましたが、これは「調査するんだったら開示しろ！」ということをお願いしたいわけではないのです。大学院生の読者のために、念のためにそれは言っておきたい。ほくは方法として、それを選んでいくわけで、絶対的な倫理を説いているのではありません。

ここでもうひとつ話したいのは、研究者およびその書いたものが作家性を帯びることについてです。ほくは調査してエスノグラフィーを書きます。それは幾許かの物語性をともなったものになるでしょう。そうなるそれは「非科学的要素」を纏うことにもなります。その点どうでしょう、ほくの場合は調査で話した人たちとの関係性のなかでそれを位置づけてみたり、あるいは自分の中でそれを呑み込む（つまり自分が作り出した物語が客観性を担保で着ないことを引き受ける）、という風になっているのですが、みなさんはどうされていますか。

**司会**：余計な付け加えかもしれませんが、人類学の場合、けっこう昔にエヴァンズ・プリチャードという古典の大家が、人類学はいわゆる自然科学的な科学を目指すべきではなく、社会の解釈を旨とする人文学を目指すべきであると宣言しています<sup>8</sup>。さらにのちに、ジェイムス・クリフォードが民族誌を書くことの作家性

と政治性を暴きます<sup>9</sup>。でも社会学は、日本の制度上でも「社会科学」に分類されていますよね。つまり方法を開示し、その方法に従えば誰もが結果を再検証できるものだという意味での実証的科学だ、という自意識のあらわれですよ、これは（笑）。

**相川**：直接の答えになるのかどうかは分かりませんが、私は調査者として地元を訪ねていた初期に、地元の人たちに調査者だと見られたくないという、ひねくれた感覚をもった時期が長く続きました（笑）。私が地元を書きたいというのは、自分の価値意識の原型を作り上げた場を描写したい、という動機付けがはたらいています。しかしフィールドで、自らを調査者というある意味では特権的な位置におくことについては後ろめたさや気恥ずかしさも伴います。

自分が「書く者」でありつつ、フィールドで普通に暮らしていける途を探るなかで試みたのが、農業者であり記録者であるという役割の獲得です。たとえば自分もメンバーである産直グループ仲間との話し合いの場での書記役をつとめています。これはホワイトが『ストリート・コーナー・ソサエティ』のなかで試みたことと似ていますが<sup>10</sup>、会議の席でメモを取って、それを後で議事録にして配ったりしました。そうして（「書く人」としての）役割を作ってしまう。みんな私が「書く人」で「ここを書きたい人」であることを知っていますから、その意図はなんとかなしに伝わっているようで、ノートやPCを持ち込んでせっせと書記をしていました。もうひとつは、実際に自分で農業やっちゃうということでした。これは私がそこで生まれた地元だからこそできたことかもしれません

8 Edward Evan Evans-Prichard (1902-1973) はイギリスの社会人類学者。1950年の講演において、社会人類学は社会を道徳の体系とみてその解釈に従事する人文学なのであり、なんらかの一般的な法則を実証的に探求する自然科学とは異なるという旨を述べた。

9 James Clifford (1945-) はアメリカの文化人類学者。クリフォード&マーカス編 [1996] 『文化を書く』、紀伊国屋書店 など。

10 William Foote White (1914-2000) はアメリカの社会学者。ホワイト [2000] 『ストリート・コーナー・ソサエティ (第4版)』、有斐閣。

が。ただ、研究のために農業やってるという意識はないんです。フィールドに入っている間に、空港反対闘争とはまったく違うルートで若者が現地に移住して若手農家に育ってきたりといったさまざまな背景と事情が重なって、私も農業にかかわるようになってしまったと思っています。大学で出会った知人を農業研修生として地元で紹介したこともあります。そんなこんなで現在にいたり、記録者であると同時に変わりゆくフィールドの変化にも関わるアクターとしての位置取りも得ているように思います。フィールドワーカーの存在自体が現場を変えていく。そうした経験をもとに書かれるものの作家性と科学性を問う作業が必要だと思えます。

**山北：**ほくがつねに意識しているのはどっち向いて書くか—誰に読んでもらいたいかということです。最終的には野宿のおっちゃんに読んでもらいたいたいというのもあるんですけど、まずは支援者の人を意識します。基本的にアカデミズムの世界で書くので、先行研究の方々の顔は一瞬浮かびますが、それはある意味で二の次なんです。最終的には現場の人に読んでもらいたいです。書くにあたって、自分の取り扱っているこの問題やテーマを現場の人たちに受け止めてもらえるだろうか、分かってもらえるだろうか、そういうことをまず念頭に置きます。そこから、じゃあどういふ先行研究が社会学にはあるんだ、という手続きをとるわけで。

**櫻田：**参与と観察を切り分けて両極に置いてみる、という二律背反がまことしやかに語られるがそれはどうなのだろう、という話がありました。これに関しては山北さん（鶴飼さん）がおっしゃるように、両方もが平行して進んでいくものだろうと思うのですが、さらに言えば、生活者としての人間が社会に参与する過程のあり方がそもそもそういうものだと思います。ですが科学的方法のミソは、本来参与も観察も二分できないものだが、それをあえて方法として二分して考えてみようというところにあ

るのではないのでしょうか。そうしないと、当たり前の日常を異物として対象化してみるということではできなくなるのではないかと思うし、そのために方法論があるのではないのでしょうか。

私は、調査の方法論は表現の方法論でもありうる、と思っています。「作家性」というのはもしかしたら近代的「主体」の考え方から来ている概念かもしれませんが、それをいちど取り払ってみる、壊してみるというのも方法論としてあってよい—それが「科学的」方法論かどうかはさておき。もちろん、できあがった映像や文章にしていく過程でいくらかのバイアスがかかっていくのは避けられないとしても、あえてそうした方法をとってみるということで新たな表現ができていくのではないかと考えています。そんな可能性を考えてやってみたのが、先にお話したインスタレーションでした。誰が、何を意図して撮ったものであるかに関わらず、その現場が映っている映像を集めて時系列で並べるといふ方法。このように、社会調査においても、日常のさまざまなことを、楽しみながら伝えていく、表現していくときに、科学性という概念がフィクションであるとしても「方法」ということの意味があるのかもしれないと思いながら、話をうかがっていました。

**司会：**方法と作家性ということ言えば、書いたものと映像との差については触れておく必要があるかもしれません。基本的には文章は説明のためのものです。描写という点では映像の情報量にはかなわない。加えて文章で構成された論文は、ある種の全体の中で論じられた状況・対象の位置づけをせずにはおかない。たとえばある出来事を事例として描写するとしても、その出来事がいつどこで起こったか、大阪のある公園で、野宿者がいて、行政がこれこれの日に来て、そこでこういうことがあったと。しかもそれはかくかくの政治経済的な時代背景のもと、ネオリベリズムの風が吹き荒れるなか云々といった細部の描写も必ず全体のなかに位

置づけられる。その上で、焦点化された出来事をひとつの（あるいは2、3の）ラインに沿った説明にしていく。このあたりは大きな差でしょうか。

しかし映像も方法としての文章の抱える限界一さきほど作家性として語られたことにも通じますが一からまったく自由なわけではありません。カメラもどちらを向けるか、どこを撮るかというのはカメラを持つ人に委ねられます。フィルム編集の過程も作家性を支える作業ですね。その意味で櫻田さんの紹介されたインスタレーションは人類学者の言う多声性の確保の試みだったともいえるでしょう。また、先ほどから議論されている作家性の話とは、長期でフィールドと関わることと、その結果で出てくる論文や映像作品（フッテージのようなものも含め）との関係の話でもあるように思えてきます。

## ● 参与観察後にやってくる「書けなさ」「しゃべれなさ」

山北：以前野宿者の人たちと日常的に接していた時期には、そのことについてしゃべっててもいいかなという気分があったんですが、現場から離れて時間がたってしまった現在、前と同じ感覚でしゃべれるかということ、今日なんかもすごく微妙で、もうそろそろしゃべりたくないんですよ。そういうこと言うとはんま研究者としての義務を放棄していることになりますけど、どういう感覚でしゃべったらいいのかというのは、ちょっとわからなくなっているところがある。

川端：書きにくさ、しゃべりにくさの話ですが一山北さん個人の問題から離れていくかもしれないけども、たとえば、人類学なんかだと対象とする社会と調査者とのあいだに距離があるでしょ。でも日本の社会学の院生が調査するときって、それに比べてとても近いところでどーんと入っていくので、距離が取りにくい。ある

いは書くということに関しても、現場（フィールド）に滞在しているときに書いてしまう人と、こっち（ホーム）に帰ってきてから書く人というだろうし、あるいは向こうにいるときにはほんとに「記録」だけで、そこから時間と空間を隔てたこちらで（論文を）書く人がいるけども、その向こうで書くのと、こちらで書くのとはぜんぜん違う行為ですよ。

司会：人類学者の標準的なやりかたは、現場にいるときに記録を一生懸命とって、ホームに帰ってきてからストーリーを組み立てる、というものだと思う。

川端：それはけっこういろんな要素が入った話だと思うんだけど、ほくなんかはさっきお話したように（地元の）岡山に調査に入ったときに、あまりに自分にとって普通のことが毎日続いていて、それを「書く」なんて気にはなれなかった。「記録」の意味での「書く」は、かろうじて夜に寝る前に毎日書き留めてはいたんですけど、だけどそれを論文として書いたのは岡山を離れてオーストラリアの大学院に帰ってから。離れて考えると、ちょっと想像できるころがあつて。

相川：それは私もそうです。聞き書きは学部の3年ぐらいのときからずっと通っていたので、もうかれこれ10年くらいになりますけども、2006年からは現地に住んでいて、（フィールドでは）会議やいろんな集まりに出るんです。そうすると、今でもそうですが、みなさん私のことを「調査者」だと思っていない（笑）。これはとても幸福な関係だと思います。現地には新聞記者のような書き手が頻繁に往来するので、もしかしたら社会学者は比較的目立たない存在なのかもしれません（笑）。そんなかんじで、「いつかは書かなきゃいかん」と思いつつフィールドノーツ書いてて、溜まってきて、もうそろそろ論文にしようと思ったときに、現地では書けなかった。東京（の大学院）にもどってそこで書こうと思い、今年の春に農業仲間の



前で意を決して話をしました。「ちょっと時間をくれ」と。やっぱ書かないとあかんからということで。それでいま（農業見習いの）「休み」をもらってフィールドから出てきているようなものです。「学位をとるまで帰ってくるな」「早よう書け」って、ありがたい言葉に送り出されて、いまこの場におります（笑）。現場を離れて東京に行くと、これまでの経験をストーリー化して書くというモードになりますね。

**司会：**いまの話はアフリカという距離のあるフィールドでも長期滞在の場合は例外ではありません。私は妙に適応力があったというのが仇になったのかもしれないけど、やっぱり「なぜここ（フィールド）の人たちはこうするんだろう」みたいな「違和感」を感じ続ける人って強いよね。日常的に出くわすけこうなことをすんなり受け入れちゃうと「記録」の手自体も止まってしまうし、フィールドの日常の中ではどこまでが調査で、どこからが調査じゃないのかは、わからなくなってくる。アフリカの農村といえど、もうその人と普通の付き合いになってきますから。

あと、さっき山北さんがおっしゃっていた「しゃべっていいのか」という気分についてです。「記録」をがんばってしたらしたで、一段落してフィールドを離れますよね、日本に帰ってきたらスイッチが切り替わってストーリーが書けるかという、書けないんですよ。「現場」で見聞きしたものをなんらかのストーリーにのっけて、それなりのもっともらしいものができればいいんだけど、現場を知ったあとではどこかうそ臭いものになってしまったり、あるいはもっと単純に、「このストーリーに乗けるには必要なこのデータをとっていなかった」とかそういうことが発覚する（笑）。フィールドからもどって頭に現場感覚が残されたホットな状態のときはまだそういうかんじで書けないことがある。だから逆に言えば、山北さんがさっきおっしゃっていた、フィールドか

ら離れて現場感覚がなくなり、「どうしゃべっていいのか…」という時期に差し掛かっているというのは、もしかしたら頭がクールダウンして論文をバンバン平気で書ける（笑）、というフェーズに入ってきたということかもしれないですよ。

**山北：**さっき、ドキュメンタリー映画には「撮る側／撮られる側」の関係性が映りこむんだ、という話がありましたけど、まさにその辺かなと思うところがあります。参与観察の強みは、その社会の関係性のなかに入りこんで、そこから社会を見ることが出来る点だと思えます。でもそのしっぺ返しというのはおそろしいもので、（フィールドの人たちとの）関係性が薄れてしまうとアキレス腱を切られたようなもので、ストップするというか、いままさにぼくはそういう状態なんですけど。いや、もちろんそれはナイーブに過ぎる（笑）という批判も、あるとは思いますが。

**相川：**話を聞いてて、そうだなと思うんですが、東京に行って書いていると（成田の）フィールドの人たちとの関係性って、やっぱりちょっと希薄化するんですね。平たく言うと、フィールドではなにが起こっているかということが自分ではわからなくなってしまう。毎日現場にいと、毎日どこで野菜出荷の会議があるとか、飲み会があるとか、メールとかじゃなくて対面的関係のなかで全部伝わってきていたのですが、それがあたりまえのように思っていたのですが、じつはものすごい情報量のなかにはいたのだなと思います。そこから自分が身をひきはがしちゃうと、ものすごく不安になりますよね。ある時点—私の場合2009年の3月までのことまでは書けるが、それ以後のこと、たとえば今現在フィールドで起きていることをその場で体験せずに後日聞き取って、不在期間のことを滞在していた時点のことと同じ密度の記述で覆えるのかという、はつきり言ってムリです。それがすごい反作用だというのは、山北さんのお話

を自分の経験にひきつけて言えば、いま私もそういう状態ですね。

**司会：**いま相川さんがおっしゃった、濃密な情報や関係の網の目のなかに身を浸していたところから離れていることの不安というのはすごくわかります。同じように私がずっと通っていた村がいまどうかということを、私はいま語れません。だから調査期間がいつからいつまでで、当時はこうだったというのを書くしかない。じゃ、いま話された「不安」はそれで解決するじゃん、という話になるのかというと、はたしてそうか。参与観察というのは、やっているとだんだんそのコミュニティの一員になったような気になってくる—もちろんそれはフィクションなのですが、お調子者の私としてはそれが参与的なフィールドワークのうれしさのひとつですね。村の関係の網の目の中で、たとえばおれはこの家の息子なのだから、この人とはこういう親族関係、あるいはこういう場面ではこう振舞うべきなのだというのがわかってくるんで。周りの人とオトナとして社会的相互行為がかなり可能になるわけです。

で、アフリカのフィールドから日本の机の前にもどる。ホットなうちは混乱があるけどクールダウンすると「研究者＝書く人」になって、いま山北さんはその「書ける」モードに入ってるんじゃないか、という話をさっきしました。でも山北さんの「書けなさ、しゃべれなさ」はそんな切り替えがどうのという単純な話とはじつは別次元での、クールダウンしたからこそ書きにくい、しゃべりにくいという話だった。参与観察、フィールドワークを経て書くときに、コミュニティの一員として書くわけではもちろんないし、ならば研究者として書くことがフィールドからまったく離れた特別な場（view point）から書くということなのかというと、そうではない—正確に言えばそのように書きたいわけではない。参与観察って、相手との関係のなかで、つねに相互的に関係性がきまってい

き、したがって厳密には関係性は固定などせず、そのときごとの関係性のなかでこそみえて分かってくるものごとがあるという、この理解というか了解の過程そのものを書きたいという欲望が私にはある。だけど、というか、だから、現場を離れて時間が経つと、そういう感触が薄れてわからなくなってしまうんですね。

**山北：**当時は家に帰ってからも、頭の中ではフィールドに行けてたんですよ。でももうそれが、できなくなるんですよ。

**司会：**私の経験では、日本に帰ってきてから2ヶ月くらいはそれができます（笑）。自分のフィールドノーツって、イヤになるほどいろんなことを捨ててないんですよ。もう、見返してみるとほんとに貧相なもので「こんだけかよ」っていう、あの日の出来事に関する情報ってこれだけになっちゃうのかって思う。対話の内容なんかは録音記録があるのでいいけども。そういうノーツに残されていない「周辺情報」は2ヶ月以内だったら、かなり頭の中で状況が再生（replay）できて、そこから補足できる。たとえば（録音記録されている）このじいさんと話したときに隣に誰がいたのかとか、午前だったか午すぎだったかとか、この聞き取りと前後して村ではこういうことがあったとか、そういうノーツに書き留めていない情報もけっこう頭のなかに入ったままなんですよ。でも1年2年と経つとそういうのも全部とんじょうから。

**山北：**その、（こちらが思い起こすのとは）逆にね、フィールドの人が頭のなかに来てくる、というようなこともありますね。自分の家のなかにもね。それがほんとになくなってくる。そういうなかでしゃべったり書いたりするということは、ほんとに怖いんですね。

## ● 「地方は元気」か？ — 地方での研究の発信と蓄積

**司会：**ちょっとここまでのを、山北、相川、川端

各氏のフィールドとの関係の持ち方という観点からまとめましょうか。みなさんのご経験からは、「調査者は現地の人にこういう関係を持つべきだ」という教科書的な調査倫理だけでは回収できない個々のかかわりのあり方がうかがえます。関係って、こっちが一方向的に作るものじゃなく、つねに双方で作っていくものですから。山北さんの場合は、すでにそこに野宿者と支援者、という確固とした関係性が歴史的にも築かれてきたフィールドに、支援者として入っていった。調査としてはそれゆえのメリットも、もちろんデメリットや苦しさもあったでしょう。支援者にもいろいろな立場があって、全体を知りたいのでいろんな集団にコミットしていると、ある特定の支援団体からは「あいつ何者なんだ？」とか後ろ指刺されたり（笑）。相川さんの場合は、それこそ幼少のころに顔見知りだった人をたどって「なんだお前大きくなったな、こんなことやってんのか」という感じで聞き取りの相手のとりかかりも得やすいし、政治活動的には党派のちがったAさんとBさんのどちらにも聞き取りをおこなうということも、そうだから可能になったのかもしれない。川端さんの場合は地方の小さな町にはあらかじめ「タコツボ化」したようなコミュニティ群がないので、どこかに（調査で）関わるとそれで色がついちゃうというようなことがなく、逆にどこかにかかるとここにもあそこにもと広がって行って、結果いくつかのゆるやかなコミュニティを架橋していくような役回りも担ってしまうこともあった。競合意識の熾烈な団体も、先行調査もなにもないフロンティアから調査をとりかかると「開拓者」的だと（笑）。  
川端：そのあたりから、こうした社会におけるさまざまな実践の調査・記録が、調査者の存在や発表された成果などを通してどういう社会的

効果を生むのかという話に結びついていきそうですね。ぼくは地元の岡山に帰って調査をやってみようと思った。さきほどお話したとおり誰もやってないわけですからやらなきゃいけないと考えたんです。地方の問題というのはいろいろあって、だけど地方の問題を語るのが主に都市部のインテリだったり—まあぼくもその一人かもしれないですが、そういう人が一時的に珍しいものがあつたから来て、それでそのあとまた帰っていく。そうだとすると、そこに生活している人、当事者の言葉や知識としてなにも蓄積されない。そういう蓄積がないとどういうことになるかということ、たとえば地方と在日ということに関して多文化共生という問題系でのやりとりもネットワークの蓄積もなにもないものだから、すでにあるものを行政がパクってくるんですよ。それもすごくお粗末な手つきで。そしてそれをそのままやってしまう。そうした状況に対する地域住民による批判的な地域研究があつていいと思っています。いまの地方の町づくりとか、そういったものの流れを見ると、けっこう「クリエイティブな町」みたいなね、リチャード・フロリダ<sup>11</sup>みたいな話がありますが、フロリダが示すクリエイティブなまちというのは、多様性・寛容性の高さがその指標となるわけですが、彼が挙げるようなサンフランシスコのようなまちはそもそもそのようなクリティカルなものが歴史性のなかで培われている。しかし、岡山のようにそういった歴史的な経緯のないところではそのような蓄積がない。そういう地方と有機的に結びついたような言説がないからです。そこでぼくは、地元にもどってそこで生活しながらやるという理想を実践しているんです。

地方の状況に対して（地域研究が）批判的であればいけない。最初に言ったとおり、傾向

11 Richard L. Florida (1957-) はアメリカの社会学者。ジョージ・メイソン大学公共政策大学院教授。リチャード・フロリダ [2007]、『クリエイティブ・クラスの世紀—新時代の国、都市、人材の条件』、ダイヤモンド社。

としては「この人びとはこんなにがんばっているんだ」というようなエンパワー言説ばかりがある。じっさいは問題点はすごくあるんだけど誰も言おうとしないし、調査者もそれを言っていたら調査にならない。ほくの対象としている地方は、「周縁」じゃないんですよ。大都市と周縁との「あいだ」なんです。企業に言わせるとそれは開発拠点なんですよ。つまり、大都市的なものや企業からは搾取される対象なのかもしれないけど、実はその周辺部である地域やそこで生活する相対的弱者を搾取するなかで成立している。だから、そこは批判的に検討されるべきなんです。だけど、そういうところはスルーしちゃう。

**司会：**それは、近年は地方大学について構造化しつつある問題と言えるかもしれない。法人化以降の地方国立大学も少子化時代の私立大学も、地方（の自治体）とのコラボレーションにひとつの活路を見出している。助成金をとって地域社会の調査をし、成果を出してその地方でのその大学の存在意義をアピールするやり方なので、やはりさっき川端さんのおっしゃったエンパワーものになっちゃうんだと思います。研究者もそのための語彙や理念を用意してね。こうした構造のもとで地域研究から批判的な契機が徐々に失われていく危険はあります。

**川端：**そうやってエンパワーすると、よくあることとしてじつはその地方のエリートに利益が入って、その人たちが主体になってしまう。町づくりをやって誰がいちばんうれしいかというとやっぱり商店街の人たちで、あるいはそれに関わっているなにか名誉や業績のほしい地元NPOの代表だったり、それ自体が悪いわけじゃないけれど、それがいびつになってくると、大都市だと多様性があるんなグループがあるからいいんだけど、地方小都市だと一部がなんでもかんでもやっちゃうことになりかねないですから。

## ● 研究者の言説の社会的効果

**司会：**なるほど。ところで、20年、30年前ならば目立ったものでは水俣に通っていたグループのような「市民派」「社会派」と呼ばれた研究者がいました。もちろんそれは例外的少数ではありませんでしたが、限られた地域での実践で、そこには川端さんの言う蓄積があります。一方近年は、さきほど触れたようにさまざまな人文社会系の研究者、ほくらのような若手の研究者までが市民講演やタウンミーティングのような場に招かれていろいろしゃべったりということが増えてきているし、NPOや自治体との共同研究も出てきており、行政も大学もそれを奨励している。批判的研究であるにせよ政策科学であるにせよ、アカデミアのなかで閉じずに研究の成果を社会に資する形で還元する、より多くの人に議論してもらうという本来の意義からすればこれは歓迎すべき事態ですが、川端さんの話からも分かります。警戒すべき事態でもある。この点はわれわれのあいだで共有できていると思います。

さて、地方での批判的研究と議論の蓄積を、という川端さんの提起ですが、批判的研究って、どうしゃべったものか難しいところがありますよね。基本的には地方は元気だ、と言うほうがいいし。そこでわれわれやあとに続く若手研究者が、どのように研究の成果を発信していくのかです。たんにすごく分かりやすい実行可能なプランとして「お役に立ちます、こうしましょう」というのではなくて、役に立つのか立たないのかはひとまず置いておいても、どうやって研究成果を発信していくのか、発信したものがどういう効果を与えていくのか、そこを考えていく必要があると思います。たぶんこれという答えはないでしょう。ほくらは学術誌に論文を書くべきだし、書きたいと積極的に思っています。それだけじゃないなができる

か、どのようにできるか。すでに全国で数多くの取り組みがなされていると思いますが、その取り組みと社会的効果のあたりを少し話してみましようか。

それからもう1点。これはおもに櫻田さんにお聞きしたいのですが、大都市でも地方でも、ふつうの人びととの地道な議論をもつ場づくりにあたっての映像の使い方です。最初にも言いましたが、書いた論文を読んでもくれる人よりも、映した映像を見てくれる人のほうが数が多いでしょ。でもたとえば、10人中7人が分かる難易度の文章だと、文章はそれなりに7人の理解を似たものに誘導できると思うのですが、映像、とくに櫻田さんがおっしゃる「商品化されざる映像」などは、10人いれば解釈や感想は10通りに近くなるんじゃないですか。でもじっさいに映像を上映する場には解説が入ったり前後の学習会をやったりパンフレットを配ったりして方向付けや議論の触発も可能。そういう意味で上映の場をどうつくるかということ、あるいは世の中の人々がそういう「商品化されざる映像」にどうアクセスできるようにするのか、こういう点についても議論したいと思います。

川端：まず前者の社会的効果のほうですけど、研究からでてきた概念が現実の実践といびつな形で結びついているという場合がある。たとえばロバート・パットナム<sup>12</sup>の社会関係資本 (social capital) という概念の使われ方がわかりやすいと思います。べつにあらためて「社会関係資本」なんてそこで言わなくてもいいじゃない、わざわざそれを言うのは誰のためなんだ、という使い方をされる。そうした social capital 論のなかではガーディアンエンジェルスが存在というのは批判的に語られるんですけど、social capital には2種類あると。ひとつは social bridging みたいな、異なる社会集団を橋

渡りするものとして肯定的にとらえられているもの。それに対して、social capital がネガティブに駆動するものがあるとしたら social bonding という排他的な関係を生み出す可能性がある、その例としてガーディアンエンジェルスが挙げられているのをみたことがあるんですね。そのような批判はあるにしろ、心理学的な言葉が犯罪社会学の防犯のための理論—割れ窓 (broken windows) 理論のようなもともと政策反映型の概念とも糾合して、便利な合言葉として使われる。社会学をふくむ社会科学の研究者が発明したアイデアが一人歩きをはじめて、実践に従事する NPO などの活動理念といびつな感じで結びついている例です。

司会：social capital という概念は近年の代表例かもしれませんね。カタカナで「ソーシャルキャピタル」って Google で検索すると、いろんな地方自治体、ボランティア団体、企業の web サイトがどんどん出てきますものね。

川端：もちろんそうした「応用」は悪いとばかりは言えない。ひとつの時代の要請ですから。しかしほくの目から見てそれがいびつな効果を発揮してみえる例があるということです。それはたとえばじっさいは予算がないなかで安価な人的資源—「ボランティア」の確保に、つまり体のいい (地方のガバナンスの) アウトソーシングに結びついているわけです。

司会：こちらも例をあげれば、対アフリカ諸国などいわゆる発展途上国への国際開発援助の場面でここ20年余りのあいだ使われてきた「参加 (participation)」という概念があります。開発学 (development studies) では10年かそこらで農村部の貧困撲滅のためにはこれこれの処方、という流行のフレームの盛衰というのがどうやらあるようです。最近20年では、かつてのように政府間援助でどーんと道路や橋やという

12 Robert David Putnam (1940-) はアメリカの政治学者で、ハーバード大学教授。日本における社会関係資本概念 (ソーシャル・キャピタル) の形成にもっとも影響を与えた論者。ロバート・D・パットナム [2006] 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房。

でっかいインフラを作っていくというものへのある種のアンチとして、もっと草の根の農村のニーズをくみ上げたきめ細かな支援が必要だ、そのためには住民参加型の開発プログラムを、という流れがあります。その意義はもっともなのですが、これが各地で実施されるよう汎用性を高めたマニュアルや制度にされると、怪しくなる。援助機関やNGOsなどの開発エージェントが農村部で「参加型」のミーティングをお膳立てしてニーズを話し合っただけで決める、とします。そうすると、住民のなかでわきまえた人たちは、この団体は教育や公衆衛生の充実を掲げた団体だ、ということ踏まえたうえで、じゃあ他所でやってるように学校に新校舎を、とかトイレを設置しよう、とか発案することになる(笑)。答えがあらかじめ用意されたようなもの。もちろん新校舎もトイレもいいことなのですが、「参加」というのが下手するとお仕着せの名目で、地域の一部の「わかってる人」と援助団体とのイニシアチブですすんでいくという状況が多くの場合実際のところだろうということですね。こうした潮流に対する批判的な研究群というの、日本語に訳出されたものもふくめて出てきています<sup>13</sup>。

川端：日本でも地方にはニューリーダーたちがいるわけですね、そうしたものの恩恵を受けるリーダーが。

櫻田：そういうものに対するある種のリテラシーが高い人。

川端：そうですね。だから、さっきのパットナムのアイデアがたどる帰結のようなことに関して、批判的な研究をしているシーダ・スコッチボル<sup>14</sup>という人がいます。現実には、いろいろ

なことがワシントンのロビイングの世界で決まる、よくても一部のエリートとごく一部のリテラシーの高い地方リーダーとのかろうじてのリンクでそうした再配分の政治が動いているのだと。これは日本の状況にもある程度当てはまるのではと思います。おそらくひと昔のほうが草の根の人びとのかかわりという余地はまだ大きかったのではないかと思えるのですが(これはそのような共同体がかつては存在していたということ前提としているわけではない)。岡山でのフィールドワークでもそのように理解できる状況には出くわします。

### ● 複数の当事者性のなかへ

司会：おそらくこれからも一部の有名な学者の言うこと、あるいは有力な学説やキーワードが一人歩きして流通するというような状況は不可避だと思います。社会学者や人類学者はそういう状況に対して批判的な研究を重ねてきているわけです—たとえばわれわれが自明化してしまっているようなXという概念、これはほんまやろか、あるいはこれはこういう風に社会的に機能しているのではないか、など。そういうことを学会だけではなく、せつかくならそれ以外の場でもやれないかとは思うんです。そうすることで複数の議論のアリーナを作っていければと。では、どうすればいいか。学術論文はどんどん書くし、いろんなところでしゃべって自らどんどんアリーナ作りに精力的にとりくむ、ほとんど超人的と思えるような研究者もいます—たとえば私と櫻田さんの共通の知人であるデイヴィッド・グレーバー<sup>15</sup>という人類学者なん

13 たとえば、ヒッキキ&モハン編 [2008]『変容する参加型開発—専制から変容へ』、明石書店 など。

14 Theda Skocpol (1947-) は、アメリカの歴史社会学者、政治学者。ハーバード大学教授であり、パットナムとは同僚である。スコッチボル [2007]『失われた民主主義—メンバーシップからマネージメントへ』、慶應義塾大学出版会。

15 David Graeber (1961-) はアメリカの人類学者。現在はロンドン大学ゴールドスミス校に所属。著書にグレーバー [2006]『アナーキスト人類学のための断章』、以文社。対談にグレーバー [2009]『資本主義後の世界のために—新しいアナーキズムの視座』、以文社。

かがそうですけども、ちょっとその真似は無理なので（笑）、せめて社会学者と人類学者でも、研究者と映像をみついている人とでも、NPOなど実践に従事している人とでもいいのでコラボレーションを進めていくこと、いわゆる「運動」からすれば非常に地味なことかもしれないけども、それは両方ないとダメだと思いますし、そういう地道な場を複数つくってあげればと思うんですが…

**川端：**そういう場が「仲良しグループ」のような派閥的連帯の温床となって、他のところとはかかわらないようになってしまうとよくないんでしょうけど、どうなのでしょう。もちろん限りなく寛容になることは無理があるし無意味かもしれないけども。寛容さとか柔軟性を身につけるための時間も必要で、ほくも調査を続けているうちに意識の変化を経験しました。5年ほど前に岡山ガーディアンズの調査をはじめたころは、いまからすれば表面的なことしかみなかった。最初は批判的に書いてやろうという一書いた媒体もそういう媒体だったというのもあるんですが、そういうつもりがあった。でもあらためて向こうのことをもっと知ろうと思っていろいろ話を聞いてみると、まったく違った様相というのも伺えたり、理解や関心も増してくる。そういう時間を経ると、常識的にはありえないのかもしれませんが、この人たちにホームレス支援のことを頼んでみようかという発想が出てきたり。もちろん限界はあるのですができるところもある。そのように試してみても、無理な部分とできるところがわかってくる、という試行錯誤の実践過程は推奨したい。この集団とあの集団は別、だから関わらないというのではなくて。どんどんなんでも越境して関われ、ということでもないですけど。

**司会：**これまで参与観察による質的調査のプロセスについての一連の話がありました。その特質の一つはさっき言ったように調査者と対象、あるいはカテゴリー化された対象（人間集団）

どうしの境界が、曖昧になってきたり流動的になってきたりという相貌をみせ、こちらの側で頭の中の運動のようなものが起こってくる、という点ですね。そもそも社会運動にコミットするということは、参与することで社会に対する見方を変えていくということであり、山北さんのコミットしていた「支援」という形ならば、「当事者」というものの境界がよくわからなくなってくるというか、支援する側が文字通り「間借りなり」の、そして複数の「当事者性」を獲得していく。こうした「当事者性」の領界を徐々に広げていくことが運動のひとつの理想的な定義となるのではないかと私は考えます。そういう意味では調査・記録も広い意味での運動ととらえることができるかもしれない。以上が社会学的フィールドワークと調査者の位置、および批判的研究の可能性という議題への暫定的総括でしょうか。

さてもう1点の議題ですが、批判的研究の地道な議論のための場づくり、そのより効果的な手段についてのもの、論文という研究者の主たる表現での伝えにくさの克服手段として、映像など他の手法とのコラボレーションの可能性です。自分で映像記録を撮っていたり、あるいは人の撮った映像記録を収集して、それを市民からアクセスしやすいなんらかの有用なリソースとしていくための、さまざまな人たちとのコラボレーションによる本当の意味での創発的な議論の場づくり。それはすでに方々でとりくみが始まっていることだと思うのですが、うまくいったりいかなかったりという例があればお話ししたいと思いますのですがどうでしょうか。研究者が役に立ったとか迷惑だったとか（笑）。

**櫻田：**たとえば長居公園の行政代執行のときには、若手研究者と院生有志が研究者の立場でこれは抗議すべきことだと考えて、会議を重ねて声明文を出し、かつ当日の記録をその場でweb上で配信するといったことがありました。ここには、大学に所属しない支援者も参加して

いました。そもそもその動きは、野宿者「問題」を広く共有するための用語集をweb上に作成しようという「ホームレス問題について知るためのWikiプロジェクト(仮)」<sup>16</sup>からはじまります。みんなで分担して原稿を集めました。たとえば「あ」行だったら「あいりん労働公共職業安定所」の解説ですとか、「アブレ手当て」とは何か、とか。山北さんの論文も引用されていたりします。そういう、いわゆる野宿者支援界限では一言で通用することばを一般の方にもわかるように「野宿」について流布している誤解を解くために、そして自分たちもうまく説明できるようにと始めたものです。

長居公園で行政代執行となってしまうとき、(wikiプロジェクトの) 言いたしつべが研究者の集会的声明を出すという点にこだわって、じっさいによく名の知られた研究者も含めて広い賛同を集めることができましたから、ひとつのやり方としてはよかったかなと思います<sup>17</sup>。その声明文と当日の記録、関連報道、賛同者一覧などを掲載する、ということをwikiプロジェクトでやりました。この声明とは別に「記録班」というのもあって、声明のweb上に掲載されたものの中には「記録班」の人が撮影した写真も含まれています。この「記録班」のほうにも、大学院生たちは参加していました。社会調査、とくにフィールドワークの「経験」そのものは、いろいろと悩みの尽きない過程だろうと思いますが、いざというときに集中して「出来事」の全体的で多角的な情報をドキュメントする具体的な「技術」としてとても役に立つということは何度も経験しました。

## ● 書かれたものと映像に残されたもの

司会：記録映像やその上映会は論文やその学会

発表よりも多くのオーディエンスを獲得できる、という考え方があります。書いたものを手渡してそれが読まれるかどうか、映像記録を上映してそれが見られるかどうか、という点で比べれば、たしかに映像のほうが、書いた文章よりもある種の訴求力はありそうです。一方で、さきほど申し上げたとおり映像は文章よりも受け手の解釈に対してより開かれている、解釈も感想も受け手によって各人各様である。論文は解釈も感想もリニアな説明系で誘導するので、いったん論旨に乗って読解すれば、それに対抗する強い自分なりの解釈軸を持たない限りはかなり受け取りかたは一律に収斂していく側面があります。

だけど、もう少し発表される場というものを考えれば記録映像も上映のされ方次第でずいぶんオーディエンスの受け取り方を誘導できたりします。上映会の前後に主催者の意図を反映した解説だとかパンフレットを配布したりとか。そういう方向付けは良くも悪くも、ありますよね。その点、書かれた論文だって同じこと。批判的に読もうとすれば、誰か批判の軸を持つる人に勉強会に来てもらって議論全体を別様の解釈に向けて誘発できる。論文も記録映像も、それぞれものを最終的な「成果」「作品」としてよりも、アリーナで議論する際の触媒のメディアと考えたほうがよさそうです。

櫻田：(そうしたアリーナとはちがって) 既存の映画館という装置は、いわば「逆パノプティコン」であって(笑)、観客どうしはしゃべらない—まあ、ある親密な関係にあるふたりが囁きあったりはあるだろうけど、基本的には知らない者どうし個々にある小屋に集まって、ひとつの上映作品を観るその場で議論するというようにはなっていないわけです。

司会：櫻田さんやremoの考え方では、そうし

16 <http://rootless.org/rough/>

17 <http://rootless.org/nagai/>



た映画館での上映のされ方ではないような上映のあり方を探っておられるのでしょうか。

**櫻田**：映像を囲むような場所のあり方。内容だけではなく、映像を共有する場の作り方やその方法に関しても、映画やTVとして商品化された形式とはちがったやり方を考えようとしています。

**司会**：商品化されたものとは別のやり方という点について共感しつつ、あえて少し疑問を申します。ある映像を、より多くの人に見てもらってそこから何かを考えるきっかけを得てもらおうとするときに、訴える力の強さという点でもっとも効果的なのは「わかりやすいものの提示」ですよ。これに通じているのは映画やTVといったものです。そうではないやり方というところを単純に考えると、トレードオフ的に訴求力を犠牲にしてしまうような気がします。つまり「わかりにくいものの提示」になってしまうのではないかと。たとえばさきほどお聞きした15のカメラのとらえた反G8デモの映像を素材にしたインスタレーション。これはすごく面白い試みだと思うし私も観たかったと思うけども、ややもすれば高尚なアートのようなものになって…

**櫻田**：もちろん「同時代ギャラリー」での展示でしたから…。でも提示のしかたを考えて場を

選ぶようにはしています。アートも、研究や大学と同じように「使しよう」。

**司会**：そうですね。アートの可能性を広げる、アートとそうした運動との接点を作っていく。どうしてもアートといえばギャラリーで限られた人に発信するものだと思ってしまうがちですが（研究論文も同様！）…

**櫻田**：でも、大学のユーザーとはまた違う（「ユーザー」や「オーディエンス」という呼び方はどうかと思いますがとりあえず）チャンネルがあるわけです。ひょっとすると、そのチャンネルは大学のものよりも広いかもしれない。もちろん大学も学部学生全員を考えれば、膨大と言ってもいいと思うんですが、学会、研究会とかシンポジウム、学術論文の読み手のレベルで言う小さくなるでしょう。

**川端**：批判的メディアのようなものに関する議論、たしかカルチャー・ジャミング<sup>18</sup>、『さよなら、消費社会』という本がありましたよね。カナダのカレ・ラースン<sup>19</sup>。なにかそういう政治性の高い試みもありますよね。

**櫻田**：アド・バスターズ<sup>20</sup>の人ですね。アド・バスターズにはBuy Nothing Day、「なにも買わない日」というキャンペーンがあって、そのキャンペーンを日本でやっているのがガブリエレ・ハードさん<sup>21</sup>、たしかこの春から関学にこ

18 カルチュラル・ジャマーとは、グローバルなメディア活動家のネットワークである。culture jamming はメディアにおける商業主義的な考え方に批判的に介入し、マスメディアに新しい役割を与えることを通じて人びとのライフスタイルや思考を変革することを目指している。

19 Kalle Lasn (1942-) はエストニア生まれ。かつて日本にも10年くらい住んでいた。「アドバスターズ・メディア財団」創始者。1970年からカナダで映画製作、実験映画やドキュメンタリー作品で国際的な賞を獲得するなど活躍している。市民の目線から商業主義的なメディアに異議を唱え、市民によるオルタナティブなメディア発信をするための活動を繰り返している。「無買デー」「ノーTVウィーク」「2分間のメディア改革」「真のコスト経済」などユニークな活動を展開している。

20 カナダのバンクーバーで1989年に設立された非営利のアドバスターズ・メディア財団が刊行するヴィジュアル誌。広告バスターの名のとおり、消費社会批判の視覚的メッセージを商業的広告を超えるクオリティで発信している。文字通り何も買わない無買日 (Buy Nothing Day)、テレビ消灯ウィーク、ブランドロゴの代わりに黒丸印 (Black Spot)、ノー自動車デー、クリティカル・マス (自転車で人びとが道路を取り戻す運動) などのキャンペーンを展開。

21 Gabriele Hadl は本年より関西学院大学社会学部助教。メディア・スタディーズ。1973年オーストリア生まれ。1999年のクリスマス・シーズン、市場河原町の百貨店前で無買日キャンペーンのため禅タクロースに変

られました。

## ● 記録映像を囲んで語らう場づくり

**司会：**さて、話をどうまとめたものか（笑）。すでに申し上げたように、地道な社会調査や記録は、ふだん光の当たらないような社会や人間活動、生の一側面に光をあてます。この意義は今日ここにお集まりいただいたみなさんにどうやら共有されている。たとえばこの座談会のキーワードに「運動」があり、いわゆる「社会運動」というのはそれこそデモや暴動、団体交渉といった派手な「権力との対立」の側面が着目され、ある標準化された語りで「運動史」のなかに位置づけられ伝達されがちです。が、ひとつの運動の現場にいろいろな角度から見ることができ、標準化されざる側面を確認できる。そしていったん「運動史」を離れて運動に従事している人びとや地域にとっての運動、その記憶に寄り添って社会をみてみる。こうした取り組みをみなさんなさっていると思います。

ここでいまいちど確認してみたいのは、こうしたもの—いっけんわかりにくく、専門的な学術論文やマニアックなドキュメント映像を介して一部の人びとに受容されるにとどまるかと思われるようなものを、どうやってより広く共有していくか、ということです。ハリウッド映画はあっていい。派手な運動の側面ももちろん必要。でも、みなさんが扱っているようなものごとを、狭い範囲の流通に閉じ込めておくのは悔しいので、ふつうに人びとがアクセスしやすい形で提示や展示、あるいはアーカイブスのような共有のしかけを構築していくには、どのよう

なやり方があるか。そこをなんとか見通して座談会を終えたいと思うんですが（笑）。

**櫻田：**場の作り方というのはいろいろ考えられますが、それはこの先ずっと模索し続けることになるかと思います。さきほど映像やアートには大学や研究とはちがったチャンネルがある、と言いました。現実としてわれわれのとりくみは、量的にはマスコミにかなっていない。でも映像を囲む場作りの価値は、そこに参加する人数だけでは測れないでしょう。たとえば同じ20分の映像をみて、その内容を噛み砕いて共有する可能性を高めることは、その「場作り」によって可能になるのだと思います。それはたとえば、世間で話題の映画作品を次々に映画館やレンタルDVDで観るという行為を無反省に繰り返すのと比べると、映像を観るという行為の質や深さの点では、単に量的なものに還元できない意味があるかと思うのです。—もちろんそうしたやり方が人数的な限界をとまっている、ということも言えるのですが。

場作りの要素にはこれまで話したもののほかに、会場の位置する地域をどこにするかとか、その地域の方々とのもともとのかかわりはどの程度かとか、参加費の設定（有料／無料も含め）とか、いろいろ考えるべき点があります。こうしていろいろな場づくりやその方法を考えていくのもremoの仕事だと思っています。

**司会：**せっかくですので、別の例でお話していただけますか。

**櫻田：**remoの8mmフィルム・プロジェクト<sup>22</sup>の例がいいかと思います。remoのスペースはかつて大阪市浪速区の新世界という地域にあって、新世界の商店街の方々とのお付き合いのなかで、各家庭に8mmで残されている地元

身。これが全世界に広まり無買日のキャラクターが禅タクロースに。実は修士課程の研究が日本社会のサンタクロース受容だったという。博士論文では世界情報社会サミット（WSIS）をテーマに市民社会メディア論を展開した。

22 AHA! project (Archive for Human Activities/人間の営みのためのアーカイブ)、ちなみに担当者は関学社会学部出身の松本篤。

の映像を探していくところから始まりました。この作業には、その地域の記憶を掘り起こすような意味あいもあるんです。

ご家庭への出張上映会もおこなっています。ご家族や親戚の方々が集まるときなどに、所蔵されている8mmフィルムの鑑賞機会を提供する事業です。8mmフィルムは残っているけども映写機はない、という状態の映像記録がたくさんあるので、そこへ映写技師が訪れて上映会をするというわけです。どなたかのお誕生日とか、なにかの記念日だとか、あるいは法事などという場合が多いようです。こうしたご家庭への出張上映会だけではなく、地域でのそうした上映会を、集会所などに場所を用意して催す場合もあります。もちろん公開鑑賞会の場合には、フィルム提供者であるご家族の「一緒にやりましょう」という意志があってはじめて成り立ちます。

**司会：**ご家庭の倉庫などに眠っている8mmフィルムを、remoが映写機持込みで訪問上映する、と。

**川端：**フィルムの内容は、どういったものが多いんでしょうか。

**櫻田：**基本的には、いわゆるホームビデオのようなものが多く、こどもと遊びに行ったときの記録とか、ほんとうにいろいろです。

**司会：**なるほど。それで、上映された映像の中の女の子や男の子は、いまやおばちゃんやおっちゃんになっているわけですね。

**櫻田：**そう、それでその上映会場にいらしたりしますね。8mmフィルムにはサウンドトラックがないので、その場でどなたかが弁士、語り部になりはじめることがあります。上手くいくと、解説をつける方のお話でとても面白くなる

(笑)<sup>23</sup>。この8mmには音声記録がないという要素は、映像を囲む場作りに思わぬ効果を発揮しますね。法事に集まられた方々が笑い転げて語り合って、こんな楽しい法事をいままでみたことがない、いいなあ、と思いました。楽しい法事を経験していないのは櫻田家の問題かもしれないですが(笑)。

**相川：**2006年の秋、成田で小川プロ作品の上映会がおそらく数十年ぶりに開かれました。映画の中に登場する人々が大挙して来場し、会場は熱気に包まれて倒れる人が出たくらいでした。熱気のあまり会場の窓を開け放して上映(笑)。あれはほんとうに面白く、おそらく原初的な映画経験とはこうだったのではないかと思いました。映画を観ながら会場があれほど沸くというのはいまの日本ではまずありえない光景でしょう。会場に集まったじいさんばあさん(おじさんおばさん)方にとっては30年前の自分が画面に出ているわけです。それを観て、笑ったり怒ったり泣いたり。支援者だった方も会場にちらほらおり、上映会場全体が記憶再生の場ようになっていました。

ここ数十年間、日本のドキュメンタリー、なかでも小川プロの作品群は、若いドキュメンタリストを中心に海外でも高く評価されています。ですが、映画が撮影された地域で上映する機会がそれほどなかったんです。そういう意味では、時を隔てたいま、映像を、カメラに撮られた人たちのもとに還す(帰す)というのとはとてもよかったと思いました。弁士はとくに設けていませんでした。すでに会場には撮影当時の現地経験をもった無数の弁士がいて、それぞれに弁舌をふるっていましたから(笑)。

**司会：**うーん、社会学者の欲ですが、どうして

23 実際には、こうした場のファシリテートにも技術が求められるためにremoスタッフはかなり話し合います。フィルムをどういう順番で流すか、どういう話題を持出すか、当日会場での進行作業において人前にいつ出て、いつ引くかなどかなり周到に打ち合わせます。先の法事のお宅の会場には50人くらいのみなさんがお集まりでしたが、remoスタッフは5人でした。で、経験からすれば会場に集まる方々の数が100人になると難しかった。50人くらいがちょうどいいのかもしれませんが。

もその会場の現象そのものを記述したいという思いに駆られますね。でも、10人が同時にわーっとしゃべりはじめると追いつかないな(笑)。

**櫻田**：たしかにそういう映像を囲んで語り合う場自体をどうドキュメントするかというのは大きな課題ですね。これは、後日インタビューするというのは遅すぎるでしょうし。

**相川**：映画は成田に関わる歴史展示の一環として上映されました。会場で感想のアンケートをとって、その結果を後日公開しました<sup>24</sup>。

## ● 社会の調査・記録が光を当てるもの

**川端**：地元の記憶ということでお話をすると、たとえば在日一世の方々、歳をとって亡くなっていくので、証言を記録して残していくというプロジェクトがあるんですね。新書にもなっています<sup>25</sup>。だけど、いま生きている人びとのものを記録にして残していくという取り組みは、意外とないんですよ。それをやることのメリットのひとつは、ほくの言葉で言えば「しょぼい声」を残すことができるんですよ。それは、まだじっさいにやろうと思ったことはないんですけど、誰かやらないのかなとか、いつかできたらいいなとつねに思っています。

**相川**：その点については私もすごく自分の調査で意識するようにしています。調査の主題は三里塚闘争ですが、自分自身がこのトピックに運動研究という視角でのみ取り組むことは留保したいと思っています。「三里塚」のイメージに固着しているものをどこかで引き剥がしたい思いがあります。白石さんがさきほどからいわれている複数の生のあり方に光を当てるとのことと重なると思うんですが、十年一日のごとき「闘争の地・三里塚」というイメージから研究

者も自由ではなくて—社会学者にも運動経験をお持ちの方が少なくないということもありますが、やはり華々しい70年代の三里塚闘争のイメージで時間が止まっているところがあり、しばしばそういうものを期待される。けどもそれは裏切りたかった。

そこで私がやったのは、ご自分でこれまで何らかの運動の記録を書かれていない元活動家の人たちにこそ聞き取りをお願いすることでした。農民と同じように、活動家だって生活者として暮らしながらあたりまえのいろんなものごと経験してきたわけですよ。そうした、その後何十年にもわたる生活者の側面に着目し、これまで標準化された闘争の物語の中で捨象されてきた部分に注目したかった。だから進めてきた調査は活動家のキャリアやライフストーリーの聞き取りなんですけど、それはいままで語られなかった声を拾遺していくことです。話し手の方々も多くが50歳代で、いまも企業や自衛で働いていたり、いまも地道に（働きながら）活動を続けている人もいます。もちろん現在もアクティブな人ばかりでもない。調査途上で、アクティブな人ばかりを追ってはいけませんだと思いついて意識的に方針転換しました。

**川端**：話をうかがっていて、全国各地に散らばって働いている人、活動を続けている人／続けていない人などさまざまな方々に聞き取りをされているという点が興味深いと思いました。というのは、ほくの場合で言えばかつてのような（地縁的な根拠を持った）エスニックコミュニティなんか地方にはもうほとんどないですよ。たとえばそういう地域をみると在日の人の家よりも日本人の家のほうが多かったりね。まとまって暮らしていることによる在日アイデンティティ形成のようなことがないわけです。ほくの研究に関して別の例で言えば、地方

24 歴史展示と上映会の来場者の感想は、右記報告書に収録されている。航空科学振興財団歴史伝承委員会 [2007]『2006年度歴史伝承委員会調査報告書』同委員会。

25 小熊英二・姜尚中編 [2008]『在日一世の記録』、集英社新書。

のホームレスの人たちも、とくに集団は形成していませんし、ずーっとホームレスであるわけではない。そういうところまで広げていくと、なにかエキゾチックな対象としての社会集団のようなもの、「キャラとして映える」ものではないものをどういう風に記述していくか、という課題が浮上しますね。

**相川：**やはり、個別にキャリアとかライフストーリーを追っていくと同時に、語りに内在した分析だけでなく、たとえば特定の型のキャリアやライフストーリーを可能にする、話し手を取りまく社会関係までみていかないといけないなと思います。どの聞き取りでも、運動仲間と人間関係が完全に切れて、まったく孤独に運動・支援の記憶を保持し、それを反芻しながら語るというような方は少なく、むしろなんらかのゆるやかな（元）活動家のネットワークのなかに埋め込まれている方がほとんどです。それは闘争から生まれた紐帯だけど、何らかの運動への関与を目的として今も維持されているものばかりではなかった。ネットワークの意味も変化している。同窓会だったり、（産直販売の売り手と買い手のような関係を含んだ）農のネットワークだったり…必ずしも三里塚闘争やそのほかの運動そのものではないなにかで紐帯をもっている・あるいはそういうものへと転化しているというケースにいくつも出会いました。このあたりのリアリティを記述したいと思っています。

**川端：**before と after をみていくのは大事ですね。たとえば移民研究にしても、いまそこで人びとがなにをしているのかということだけをみていてもわからないけども、その人たちのbefore と after、前は何をしていたのか、これからどこに行くんだろう、ということをつとめていくとみえてくるものがたくさんあるでしょう。もちろん、そのコミュニティ内の規範だとかかれらの暮らし向きなどはわかるし大事なんだけども。

**相川：**たしかに、もと常駐支援者の聞き取りをしていて、移民研究と通ずるところがあるのではないかと思った覚えがあります。chain migration っていう概念があるでしょう。もともと同じ団結小屋に住んでいた支援者たちがその後特定の傾向の職種に就いていたり、特定の地域にすんでいることがあったりしますから。そこには、先行者が後続者をサポートしているようなことが、聞き取りをしていくと明らかになってきます。都市部の大学から三里塚に常駐して、職歴がない状態で現地を出て都市部へ再流入していくわけですけども、地方から大学に出てきて成田の農村で数年間暮らして、また都市へと。そこで、それまでの運動経験や記憶、紐帯がスティグマとして不利に作用する場合もあるが、そればかりではなく、常駐活動家が生活を再建していく際に資源として活かされている場合もある。そのダイナミズムはとても興味深いものです。

類型化してみれば、私は4つほどのアクターを追っていて、第1はもともと地元に住んでいた人、第2は闘争が激しい時期に入ってきて出て行った人、第3は成田に（支援で）入ったまま住み続けている人、第4は近年になって、かつての闘争とは全く別の文脈で入ってきて農業をやっている若い世代。これらのアクターの位置づけは、自分の研究テーマの第一の柱である「運動の記憶」としては、これまでお話しした前3者への聞き取りと分析ということですね。もう一つの柱である「運動の帰結と地域変容」というところでは第1者と第4者が鍵となるアクターです。これは、調査の社会への還元につながるのかもしれないと思っていますが、いま成田で起こっていることにも目を向けています。具体的にいえば、かつて闘争を続けていくための経済基盤の強化策として有機農業を導入した農家や農業団体が、いま現在では農業で生活を立てていきたいというIターンの移住者、若者たちを育成するインキュベーター（incubator、

起業支援者)のような機能を地域で果たしつつある。まだ小さな動きかも知れませんが、闘争から生まれた農業の機能変化や意味変容という事例は、たとえば長期的に見た場合の運動の潜勢力を考察するさいに、重要な鍵となるのではないかと考えています。

## ● 社会から社会へ——媒体としての調査・記録

**相川**：そういうわけで、最初は運動研究の視角から入っていったのですが、長期的にフィールドで生起する出来事をみていくなかで、調査の主題があらたに立ち上がります。闘争を経験してきた人びと、そして組織に蓄積された歴史性をひっくりめ、そのうえで現在の成田で生起しつつある新たな農民育成に向けた動きを追う調査も進めてきました。資金や農業経験やネットワークを持たない新規参入者へのサポートネットワーク—都市にも連繫しお互いをつないでいくようなネットワークの形成、というテーマです。

そんなわけで、反空港闘争と連携した農業から出発し、地域と農業とのかかわりの変化、そのなかで自生的に蓄積されてきた就農支援システムの分析へと私の調査史はシフトしてきましたが、もしかしたらこれは固有で特殊な三里塚のケーススタディーにとどまらない研究になるかもしれない、という希望も最近では抱いています。ほかの地域、かりにその地域に運動がなかるうが、とくに過疎地帯の農村をなんとか活性化したいと思っている方々の参考事例として、応用の可能性があるのではないかと。それこそ既に話に出たように、地方の大学は地域との連携を唱導していますが、非農家出身者の就農支援・育成に関するノウハウはこれまで大学にそれほど蓄積されてこなかった。この方面で、若輩ながらなにか実践的活動ができればという思いもあります。

**司会**：地域エンパワーメントというコンセプト

も、さきほどの話では腐されっぱなしだったですが(笑)、ただ腐すは易し。研究者の实のあるコミットメントによってじゅうぶん可能性をもっているといえますね。

**相川**：いっけんすると関連がないかのような運動研究・活動家研究と、新規参入者の研究などの農業研究とが、同一の主題やフィールドの内部で絡み合っていて、私のなかでは片方を探って片方を捨てるということではできない不可分の関係になっています。フィールドが先行し、テーマがあとからついてくる。そこがフィールドワークの面白さであり、私にとっての収穫であったのですが、じっさいに論文を書くとなるとどう書けばいいかという戦略的問題は相当にあり、四苦八苦しています(笑)。

**司会**：おっしゃるとおり、フィールドワークでやっている、通常は異なるカテゴリ、異なるジャンルに属すとされている事象や問題がごく自然に架橋されたかのような瞬間ってありますね。それはやがて論文の構成段階だと障碍になるのだけど、研究者本人にとってはなかなか得がたいハッピーな瞬間ですね。その障碍をなんとかして乗り越えつつ書きたいし、伝えたい。

さて...そろそろ時間をかなり超過しているので無理矢理終わらせようと思います(笑)。それぞれの方の調査のスタイルとスタンス、調査・記録の共有の方途からはじまって、座談会の後半におよぶにつれて、広く社会に生きる多数の生から発した調査・記録が、再び多数の生へと向けられる媒体となるべきなかでどういうメディアートの戦略が可能かというような方向に話が逢着しました。思えば運動にコミットする実践者・活動家の人びとと同じくらい地道な作業に、われわれも従事しているのかもしれませんが。その意味では調査・記録の活動自体も運動なのです。社会に資する調査とはなにかという問いへの直接の回答ではないにせよ、社会調査も記録も、じつはそもそも社会から社会へとつないでゆくための媒体なのだというイメージ

を確認できたのは、今日の大きな収穫でした。

じつは座談会タイトルの後半部、「記録の運動」には上記のような意図を込めていたのですが、それには remo の活動のことが私の念頭にありました。大学の研究者は、なんだかんだ言っても権威に準拠できるし、われわれ世代は厳しいにしろなんとか食っていけるかもしれない。そこへいくとこれまでにない新しいことに地道に取り組まれている remo の活動には頭が下がります。今回の座談会で共有できたと思える見通しから、これから少しずつでもなんらかのコラボレーションの機会を作っていければ、

そのなかで創発的なやりとりが広がっていけばいいなと思います。

**櫻田**：そうですね。もちろん大学にもならでの資源や使い道はありますが、大学の敷地を離れてもそういう場をつくることはできるということは強調しておきたいところです。そのためにも remo を活用してください、と申し添えておきます。

**司会**：ではみなさん、本日は長丁場にお付き合いいただきおつかれさまでした。どうもありがとうございました。

(了)